二〇一八年一〇月二六日

焼き藷がご褒美となる庭仕事　三刀

落柿舎へ辿る畦道草もみぢ　菜々

山容の現れては失せる早霧かな　はく子

二〇一八年一〇月二五日

朝練の声はソプラノ森の秋　もとこ

光背のやうな秋日や高野山　なつき

目鼻なき羅漢の顔へ秋日影　隆松

門ごとに名入り提灯秋祭　やよい

二〇一八年一〇月二四日

秋夕焼ジャングルジムの児ら包む　たか子

どんぐりに顔描き並ぶ無人駅　智恵子

豊年を謝して獅子舞ふ高梯子　やよい

川下り左見右見して紅葉狩　せいじ

二〇一八年一〇月二三日

勝運の社はここと鵙高音　さつき

磊磊のせせらぎ覆ふ渓紅葉　宏虎

豊の田の一画に立つ売地札　たかを

暮れてなほ金波耀く稲田かな　明日香

野仏に秋思の膝を折りにけり　菜々

観覧車いま天辺や鳥渡る　たか子

二〇一八年一〇月二二日

澄む秋や投げ銭箱に鳴る小銭　なつき

ひたひたと潮さす渚十三夜　三刀

アルバムに子育ての日々秋灯下　菜々

二〇一八年一〇月二一日

尖塔のクルスにかかる明けの月　せいじ

二〇一八年一〇月二〇日

草庵の相聞歌碑に小鳥来る　なつき

園丁の姉さん被り菊日和　せいじ

すり鉢は夫が押さえてとろろ汁　菜々

毎日句会みのる選・二〇一八年一〇月二八日